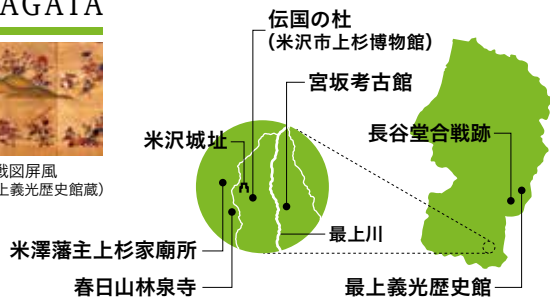


YAMAGATA



長谷堂合戦図屏風
(複製/最上義光歴史館蔵)



北の関ヶ原合戦 関連年表

慶長3年	1月10日	豊臣秀吉、上杉景勝を会津へ移封。景勝、会津下向
	7月	五大老・五奉行制の始動
	8月18日	秀吉、死去
	10月上旬	景勝、上洛
慶長4年	1月19日	徳川家康の姻戚関係の問題化
	閏3月3日	前田利家、死去。翌日、石田三成襲撃事件
	閏3月10日	三成、隠退。3日後、家康が伏見城入り
	8月	景勝、会津下向
慶長5(1600)年	9月28日	家康、大坂城西丸入り
	1月~3月	景勝に謀反の嫌疑がかかる。景勝の上洛をめぐる上杉氏と豊臣政権との交渉
	4月1日	西笑承兌、直江兼続に宛て上洛などを求める書状発送
	4月10日	豊臣政権、上洛交渉のため、会津へ伊奈図書・河村長門を派遣
	4月14日	兼続、承兌へ返書(直江状)発送
	5月中旬	景勝、伊奈らとの交渉の結果、条件付きの上洛容認を回答。家康、景勝に無条件で6月上旬までの上洛を要求。家康、諸将に会津出兵の準備を命令
	6月10日	景勝、家康率いる豊臣勢の迎撃準備を命令
	6月16日	家康ら、会津に向けて出兵
	7月7日	家康、最上義光に奥羽諸領主を引率しての米沢攻撃を命令
	7月中旬	三成、毛利輝元、宇喜多秀家ら、家康に対して蜂起
	7月17日	家康を弾劾する「内府違ひの条々」を全国に送付
	7月23日	家康、会津攻撃の延期を奥羽諸将に通告
	7月25日	小山評定のち西上。伊達政宗、上杉方白石城(宮城県白石市)を奪取。8月中旬まで梁川・福島方面で軍事衝突
	8月1日	三成ら、伏見城攻略
	8月上旬	景勝、三成らと連携。越後一揆蜂起。兼続、奥羽諸将へ「内府違ひの条々」を転送し、西軍への勧誘開始
	8月中旬	兼続、義光・政宗らと交渉開始。義光に加勢の奥羽領主らの帰国
	9月8日	兼続、交渉停滞の打開のため、山形出兵
	9月15日	兼続、長谷堂城攻囲。関ヶ原合戦
	9月17日	義光、政宗に援軍要請。政宗、留守政景派遣
	9月30日	関ヶ原合戦の結果により、兼続撤退。義光ら追撃戦
	10月1日	兼続、上杉領へ撤退。三成ら、処刑
	10月23日	徳川方より上杉氏無事の内証を得て戦闘回避
	12月22日	景勝、本庄繁長を上洛交渉のため上方へ派遣
慶長6年	4月24日	義光、庄内制圧
	7月24日	景勝・兼続、上洛
	8月24日	景勝、米沢30万石へ減封

資料提供/阿部哲人

講師：阿部哲人氏



昭和44年、山形県生まれ。東北大学大学院文学研究科博士課程後期単位取得満期退学。米沢市上杉博物館学芸員。論文に「関ヶ原合戦と奥羽の諸大名」(高橋充編『東北の中世史5 東北近世の胎動』吉川弘文館)、「慶長五年の戦局と最上義光」(『山形史学研究』)など。



深まる
一冊

直江兼続と関ヶ原
公益財団法人 福島県文化振興財団編
(戎光祥出版)

北の関ヶ原合戦をめぐる動向を、政治的抗争として上杉氏の立場から示す。会津移封から時間に沿って丁寧に説明されている。



主催：一般社団法人東北観光推進機構、東日本旅客鉄道株式会社 後援：山形県、公益財団法人東日本鉄道文化財団

東北歴史文化講座

TOHOKU JAPAN

JR東日本

YAMAGATA

山形

第6回 第1部

北の関ヶ原合戦と 上杉家の思惑

天下分け目の決戦は奥羽で始まった



2019.9.28(SAT)13:00

伝 上杉景勝所用 具足(宮坂考古館蔵)

北の関ヶ原合戦と上杉家の思惑 天下分け目の決戦は奥羽で始まった



「北の関ヶ原」で最大の激戦地となった長谷堂城は古くから天然の要害だった(写真は長谷堂城跡)

1 東北諸侯のつば競り合い その裏で渦巻く攻略戦

石田三成を討つため、徳川家康が西へと進軍している最中、東北である異変が起きた。上杉景勝の重臣・直江兼統を指揮官とする会津の軍勢が、出羽の最上義光領へ攻め入ったのだ。慶長5(1600)年9月、慶長出羽合戦の勃発である。豊臣政権の大老である景勝を三成方、対抗する最上と伊達を徳川方と見る構図と、時を同じくして美濃で関ヶ原の戦いが起きたことから、この紛争は「北の関ヶ原」とも呼ばれる。従来、この合戦の実相は、天下分け目の混乱に乗じた領土争いと捉えられていた。しかし、地方の領主たちによる単純な領土争いではないことが、近年の文献研究などで分かってきた。上杉軍が出羽攻めに至った背後では、中央勢力の動向と深く関わる、東北の領主たちの攻略戦が展開されていたのである。



上杉景勝像。米沢藩初代藩主として城下町の基盤を築き上げた(米沢市上杉博物館蔵)

2 東北を抑え、家康の背後を突く 景勝に期待された役割

ことの発端は、景勝にかけられた謀反の疑いだった。豊臣政権からの釈明のための上洛要請に景勝は従わず、家康は上杉直江状写。上洛を迫る政権からの書状を受け、兼統が痛烈な皮肉を込めて書いた返書として知られている(米沢市上杉博物館蔵)



討伐を号令する。だが、決戦直前に三成の挙兵を知らされ、家康は急遽、上杉包囲網を解いて三成討伐の準備に入った。これが「北の関ヶ原」が起こる2カ月前の情勢である。

会津は、南東北の要衝だった。最上や伊達といった北の諸大名を抑え、関東にもにらみを利かせられる位置にある。反家康派の景勝に期待された役割は、家康が西上している間に関東へ兵を出し、家康の後方を脅かすことにあった。上杉包囲網が解かれた後、景勝は最上・伊達らと和睦交渉に入っている。にもかかわらず、これらを破談にするかたちで最上領へ攻め込んだのだ。そこに「北の関ヶ原」の真相に迫る鍵がある。



「愛」の前立で有名な金小札浅葱糸威二枚胴具足。兼統所用と伝わる(上杉神社蔵)

3 1日で終結した関ヶ原の戦い 景勝と兼統の大誤算

上杉軍は、米沢と庄内の2方面から最上領に侵攻した。米沢から入った兼統の軍勢は畑谷城(山辺町)を落としたが、長谷堂城(山形市)で苦戦を強いられ、最上軍と対峙。そこへ、誰もが予想だにしない知らせが届く。関ヶ原での戦いがたったの1日で決着し、家康が勝利したというのだ。当時、関ヶ原の戦いは年を越すだろうというのが、大方の見立てだったといわれている。諸将は一大決戦の勝敗がどう転ぶか、様子見をしていたのである。一刻も早く、東北を統制下に置き、関東に打って出ようと考えていた上杉軍にとって、この短期決着は大誤算だった。兼統は兵を引き、敵将も賞賛するほどの撤退戦を繰り広げ



「北の関ヶ原」の戦功で義光は57万石を拝領、山形城を居城とした。城跡(上)の傍らには銅像(左)が立つ

て米沢へ戻る。これで「北の関ヶ原」も決着をみた。後に、関ヶ原は「天下分け目」といわれるようになるが、この家康の勝利によって、その後の東北の版図も塗り替えられていくことになるのである。

